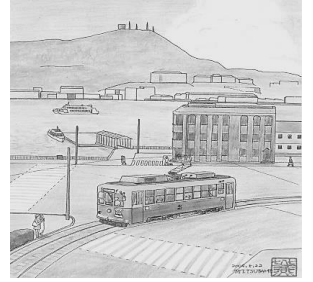


体験談

長崎原爆に想う

山口 早苗



昭和20年8月9日、学校は夏休みに入っていた。私達姉妹は、家の中にいたのです。ラジオは「空襲警報解除」「警戒警報発令」と放送しています。上空を飛ぶ飛行機の音が鈍く聞こえています。突然、目を射るようなピカッとする光が目の前に飛んできたのです。びっくりした私は畳の上で、ハイハイして遊んでいる10ヶ月になる妹を片手で抱き上げ、その近くにいた4歳の妹の手を引いて、昼食の用意に忙しい祖母の近くに走って行きました。一年生と二年生の妹達も祖母のもとへ走って行きました。と、今度は地の底から響いてきたのかと思うほどの音がしたのです。

『ドロドロドロドーン』という何とも言えない音がして家中が揺れて動いたように思いました。怖くなって、私達5人はワアワア泣きながら一塊になっていました。

すると祖母はどこからかフツンのような物を持ってきて頭の上から、それをかぶせてバケツの水をジャブジャブかけたようです。私達、孫娘を何とか守らねばと必死の思いだったのでしょう。

畑仕事から母は戻ってきました。暫くして母と一緒に家の中に行ってみました。さっきまでの家の中の様子は全く無くなり、襖や障子など建っているものは一つも無く、みんな倒れてめっちゃめっちゃになり、棚においてあったくすり等もどこかへ飛んでありません。足の踏み場もない有様です。

夕方になりました。私達家族もご近所の人達と共に家の裏山の防空壕に避難しました。

4歳の妹は、『見て見て、あっちの方がすごくきれいね』と指差します。

そこから見えたのは、浦上方面(爆心地の長崎市松山町)の方角の空の色が真っ赤に染まり、あたり一面メラメラと燃え上がっています。たった一発の原子爆弾は、一瞬にして生きている全ての命を奪い取り、家を焼き払い、人間を焼き殺し、街全体を死の海と化してしまったのです。

何という恐ろしい事でしょうか。

長崎市で一番高い山高さ333mの稲佐山の麓にある私の家、長崎市小浦町(元の私の自宅)から爆心地までの距離4.7kmです。その間には小さな山があり川があり海も橋も架かっています。

こんな遠くに離れた所からでも見える程、人の血を吸った赤い火は、何日も何日も燃え続けたのです。

その晩、父は帰って来ませんでした。

翌日の夕方に帰ってきましたが身体中、傷になり頭に巻いていた包帯の姿が痛々しかったです。あんなに元気だった父は、下痢になったり吐血したりで、すっかり弱くなりました。戦後しばらくは原爆後遺症という言葉さえ無かったのです。父のような病気になった人は大勢いたのです。

いわゆる「原爆後遺症」だったのでは、ないでしょうか。でも、分からないままでも家族に見守られながら永遠の別れになってしまいました。

人々は二度と戦争を起こしては、いけないのです。私は皆様に訴えます。

戦争を起こすという事は、全世界の人類を滅ぼし、やがては、地球をも死滅させてしまうという事を、あまりにも悲しい事を知ってほしいです。